

『歌のわかれ』について

— 些少の問題 —

村 上 隆 彦

I

次のような場面が小説『歌のわかれ』の中にある。よく知られた場面である。

しかし彼はあおい顔になって机の引出しを引いた。そして鉛筆やバットの箱の奥から小さい木箱を引き出して蓋をあけ、六、七本並んだ鑿のうちから三分の丸鑿を取り出して右のポケットに入れた。

「佐野の無礼は許せるが、佐野の無礼をおまえが許すことは許せぬぞ。」

彼は細い三角鑿へちらりと眼をやったがそのままにした。それは鋭いだけに肉のなかで折れる心配があった、

彼は黙ってもう一度階段をおりた。そうして靴をはいて、被覆な

しの刃がポケットを破かぬようポケットのなかで柄から刃へかけての部分握り、ややうつむき加減になってすたと片町の方へ出て行った。(略)片町へ出た彼はやはりポケットに右手を入れたまま香林坊をのぼって行った。ブラジルの部屋はまだあかあかと灯がともっていた。彼は右腕の肘関節をまっすぐに伸ばしたまま、木の卓もろともに縫われる佐野の手の甲を幻に見ながら左手でドアを押した。

「鑿」と題された章節の結末部に置かれたこの部分は、『歌のわかれ』全体の中でも特に強い印象をもたらす部分である。「……ある人間の学生期を書いている。ある人間その片口安吉はある程度私でもある」⁽¹⁾と作者自身の云う主人公片口安吉の、青年期に特有の、そしてまた彼に独自の論理や倫理あるいは情念等が、鋭い姿でここに表明されている。そこで、中野重治を論じ、『歌のわかれ』を論じる際に多くの人がこの部分にふれることになる。

山室静氏は次のように書いている。

主人公が酒場で佐野という友達から侮辱を受ける。それを家に帰って新たに感じる。『佐野の無礼は許せるが、佐野の無礼をお前が許すことは許せぬぞ』と彼は丸鑿を擲んで立上る。この潔癖は精神に向けられている。『結局おれは、精神の貧弱さから知らず知らずどたん場を避け……（以下の引用原文省略―村上）』

これは勢いこんで酒場にとつて返した主人公が、そこに既に佐野がいなかったために刃傷沙汰に陥らずにすんだ後の反省である。ここで考えられている幸福や不幸も、勿論感性的なものではない。⁽²⁾

江藤淳氏は、「中野氏の血にひそむ『暗さ』」にふれながら次のように書いている。

作家自身がそれについてほとんど何も語らぬ以上、この「暗さ」の実体がなんであるかについては推測するほかはない。しかし『歌のわかれ』の印象的な一節、侮辱した佐野を刺そうと片口安吉がとりあげた三分の丸鑿の刃の光には、この殺意が唐突であるだけに逆にその反映があるように見える。あたかも噴出しようとする暗い衝動と、それを抑圧しようというあの道徳律がこの刃の先に凝縮されたともいうように、中野氏においては「暗さ」はむしろ暗闇に光る白刃の輝きによって表現される。⁽³⁾

また、中野重治自身、「空想家とシナリオ」「村の家」をもそこに含めたものとして言っているのだが、次のように書いている。

『歌のわかれ』について

『歌のわかれ』に流れた一つの青春がどれほどの哀憐を讀者から獲ることができただろうか。「村の家」の父親からその息子に送られたあれらの美しい手紙が、その美しさの歴史的性格において讀者に受けとられるだろうか。しかしそれらは、私にそれをのぞむ権利がある以上の深かさ確かさにおいて必ず獲られ受けとられるであろう。⁽⁴⁾

たしかに、この場面――特に「佐野の無礼は許せるが、佐野の無礼をおまえが許すことは許せぬぞ」という文言には、主人公安吉の傲慢とみえるほどにも誇りやかな自尊心、矜持の高さ、そしてそれを内面から支えるものとしての精神の潔癖性や倫理性、ないしは情念の豊かさや激しさが、鋭い姿で表現されているように見え、一人の人間が人生を生きようとしてその踏み出しの時点で見せた個性的な姿のきわだが、私たちに深い感銘をもたらす。「それらは……深さ確かさにおいて必ず獲られ受けとられるであろう」と作者が云っているとおりである。印象は鮮烈であり、それ故にその鮮烈さが、「佐野の無礼は」云々という安吉の言葉に内在する論理の（むしろ非論理の）実体を蔽うことになリかねない。つまり、安吉の言葉がもたらす感銘は、この言葉がその底に沈めている論理の堅固さ・したたかさに基づいて生じたものであるかのような錯覚を与える。「中野重治の文体一般の特徴の主要な一つは、つぎのようなものである。つぎの段階で否定されるべき命題・現象が、まず前段に定言的に提示され、ならべられる。後段に移るや否や、たちまち断ち切るような調子で前段の否定と

新しい主張とが、たたみかけてくる。それが成功的に行なわれた場合、同一内容の別の語の組合せによる表現、別のセンテンスのたたみかけが、しばしばパセティックな効果を伴ない、前段の否定と新しい主張とは論理的によりもむしろ感性的に続者を引ずり、とりこにする。前段から後段への移行には、必ずしも常に論理的なつなぎ・裏づけがあるのではない。⁽⁵⁾と、大西巨人氏が鋭く指摘しているようなことがここにもみられる。「この潔癖は精神に向けられている」という山室静氏の評言もこのことに關係して生じたもののように思われる。

一見、その底に論理の堅固さ・したたかさを沈めているかのようにみえる「佐野の無礼は許せるが、佐野の無礼をおまえが許すことは許せぬぞ」という安吉の言葉は、しかし、論理的な必然性に裏うちされた言葉とは言えない。論理上の矛盾を孕んでおり、二律背反・自家撞着がみられる。私が言おうとすることは極めてプリミティブな性質の事柄に属する。

「佐野の無礼は許せるが」と安吉本人が考えるのであるならば、どうして同一の内実をもつその「佐野の無礼をおまえが許すことは許せぬぞ」ということになるのだろうか。「佐野の無礼」の内実が、安吉の云うように「許せる」程度のそれであるならば、当然「佐野の無礼をおまえが許すこと」も許せるはずである。逆に言えば、「佐野の無礼」の内実が、「おまえが許すことは許せぬ」ようなものであるならば、これに先だちこれを先導するものとして述べられている「佐野の無礼は許せるが」という論理はそもそも成り立たない。「佐野の無礼は許せるが」と判断したのは言うまでもなく安吉本人である。安吉の

主体においてそう判断された同一の事柄が、安吉と同一人物である「おまえ」によって「許せぬぞ」と判断されるということはあり得ない。安吉の主体が見失われるからである。あたかも「許せる」無礼と「許せぬ」無礼とが、「佐野の無礼」をめぐる（というよりも、「佐野の無礼」に関して判断する安吉の判断そのものの中に）存在しているかのような錯覚を与える。つまり、「佐野の無礼」一般が一方にあり、それとは別に、特殊な——「おまえ」にとってのみ無礼と感じられるという意味で特殊な「佐野の無礼」が他方にあつて、したがって、一方は許しても他方は許せぬということになるかのである。このことは次のようなことをも意味している。

佐野と、「佐野の無礼」一般が一方にあり、その佐野と「佐野の無礼」一般に直接対峙している安吉が他方にいる。ところが、直接対峙しあっている彼らとは別に、それを見ているおまえが（このおまえは、佐野と安吉との間の出来事を反芻する過程で現われてきたとも言えるが）安吉自身の中にいる。前者の安吉は「佐野の無礼は許せるが」と考えている。しかし後者のおまえはそう考える安吉を「許すことは許せぬぞ」と考えている。そう考えることによってこのおまえは、「佐野の無礼」に対して不寛容であることを確認している。

この時安吉の視点は、佐野および「佐野の無礼」一般から、自己自身の問題、つまり自己の倫理問題に移行している。その移行の過程で安吉は、事柄を裁断する基準となる倫理的規範を厳格なものに補強しつつそれに基づいて自己を検証していった。そうした倫理的規範に基づき自己検証の結果、「おまえが許すことは許せぬぞ」という判断が生

じてきたとみることができる。

こうした態度は、自己に課したと同一の倫理的規範をもって佐野にも対することを意味し、その点で佐野の人格をおのれと同等の水準に引き上げ、したがって、対等の関係において佐野を見ているようにみてとれる。けれども実際には、「佐野の無礼は許せるが」という前段の判断から「佐野の無礼をおまえが許すことは許せぬぞ」という後段の判断への移りゆきに伴って、安吉の視点が、佐野および「佐野の無礼」一般から自己自身の問題、即ち自己の倫理問題そのものに移行していったがその過程で、佐野の存在そのものが欠落してしまっているのである。佐野の人格が対等の関係においてとり扱われたか扱われなかったかを問題にする場合に、その前提となるべき佐野の存在が、安吉の視野から脱落してしまったのである。佐野は行方をたちいわば不在になり、その時の安吉の視野にはおのれの姿だけがクローズアップされて映っていた。それ故に、「佐野の無礼は許せるが」という判断が一方の安吉には成り立ち、他方のおまえには成り立たない、という理屈が成り立つことになった。これは、佐野にとって、「佐野の無礼」が安吉にとって無礼であった以上に、無礼なことであるにちがいない。

「佐野の無礼」云々の問題にふれて佐々木基一氏は次のように書いている。

「佐野の無礼は許せるが、佐野の無礼をお前が許すことは許せぬぞ。」

この句には、何か尻の方から押しかぶせてくるものが感じられる。

『歌のわかれ』について

前句と後句との間にはほとんどひと息入れる隙間さえない。おっかぶせるようにして第二句がつづく。切迫した呼吸が生々しく感じられる。いわば第一句と第二句との中間に、本来展開されるべき、広大な認識の領域がここでは全然無視黙殺されて、倫理がほとんど感覚的な反射として生じている。何故に佐野を許せるのか一言の説明も反省も許されぬ以上、おそらくはそのとき閃めいた弱気な感情にたいする直接的な反撥として、外に表われる結果としてはただ——佐野の無礼は許せぬぞ、という問答無用の強勢のみとなり、そこに、謙虚であるより傲慢であれという彼の倫理の独断性と同じものがある(6)。

あの場面での安吉の言動と、それを支える内的衝迫あるいは心理の様態を、鋭く洞察した的確な指摘である。「謙虚であるより傲慢であれ」という彼の倫理の独断性」は、「謙虚」「傲慢」そのいずれをとるべきかを判断するに先だって、その前提として本来あるべき(判断そのものが独断的になされるのであれ、その独断を支える土台としてあるべき)事柄に関する論理的追尋ないし展開を、当初から欠いている。それを欠いたまま一つの判断(独断)が、「ほとんど感覚的な反射として生じている」のである。したがって、そのとき閃めいた弱気な感情」が、はたして「弱気な」内質のものであるかどうかの検証は行われず、また、それに「たいする真接的な反撥として」生じた「強勢」が、「弱気」に對蹠するいわば強気な感情としての実質を備えたものであるかどうかの検分も、安吉の内面において行なわれることがなか

った。

客観的にみるならば、「弱きな感情にたいする直接的な反撥として」生じた「強勢」こそが、反撥の直接的な対象になった当の感情よりも、一段と「弱気な感情」と言えるのではないか。「彼の倫理の独断性」とは、この場合、「謙虚」「傲慢」そのいずれをとるのであれ、選択の裏づけとなる論理を欠いたままでなされているという点で、まさに独断的なのである。「直観的であると同時に論理的であり、論理的であると同時に直観的であるような鋭敏な感受性⁽⁷⁾」と臼井吉見氏が指摘しているようなものが、すくなくともこの場合にはみられない。したがって、佐々木氏の言葉に従って言えば「第一句と第二句との中間に」横たわる「広大な認識の領域」が「展開されるべき」余地は、当初から安吉の内で断たれていたのである。展開に必要な論理の「刃」が今の場合には用意されていないからである。

「あたかも噴出しようとする暗い衝動と、それを抑圧しようというあの道徳律が、この刃の先に凝縮されたともいうように」と、江藤淳氏は先に引用した文章の中で云っているが、つきつめたものとしての「道徳律」はここには存在しない。むしろ「噴出しようとする暗い衝動」が、「道徳律」をはじめその他いっさいのものを「抑圧」してしまったと言うべきだろう。それ故の「無視黙殺」であり、そこで「佐野の無礼は許せぬぞ、という問答無用の強勢のみとな」ったのである。

周知のように中野重治は、斎藤茂吉の作品にみられる「わかりにくさ」にふれて、「いわば本当のわかりにくさは、茂吉は語っているの

に、語っているそのことがわかりかねるという場合である」と云い、さらに、「私の問うのは、氷山の氷に沈んだ部分に対する測定感に原因があるということではない。それはそこに原因があるにきまつている。なぜこの場合この氷山が、その実体の大部分を水中に沈めているのか、沈めねばならぬのかというのが私の問いである。」⁽⁸⁾と書いている。

こう書いた中野重治自身の作品にも「わかりにくい」ものがしばしばみられるという指摘を、臼井吉見氏をはじめ多くの人人がしている。江藤淳氏は中野の短篇「留守」を引用したあと、「中野氏の描く恋愛は、もしそれが恋愛と呼びうるものとするなら、つねにこのような難解さを持っている。『大事に思っているのだ。恋愛じゃない』と自己規定するところから恋愛感情が動き出すが、作者はその表面だけを綿密に、『正確』に、たどることしかない。(略)すでに臼井吉見氏は、『歌のわかれ』の頼子のあいまいさについて、『氷山がその実体を水中深く沈めている』ようだという名評を下している。この評言は中野重治氏のほとんどすべての小説作品にあてはまるが……」⁽⁹⁾と書いている。

ところで、「佐野の無礼……云々」にみられる不明瞭さは、それを「わかりにくさ」と言うつとすれば、それは本人が「語っているのに語っているそのことがわかりかねるという場合」のものでも、「なぜ……氷山がその実体の大部分を水中に沈めているのか」という点にかかわって生じたものでもなく、また、「その表面だけを綿密に、『正確』に、たどることしかし」ていないために生じたものでもない。初めから本

人が「語って」いず、「水中に沈めている」「その実体」そのものがなく、「その表面」を「綿密に」、「正確」に、たどること」さえしていないがためである。つまり、「測定」すべき当の論理がそもそも存在しないことからくる不明瞭さ・わかりにくさなのである。

考えてみれば、「佐野の無礼は……云々」という感情のたかぶりは、安吉が下宿へ帰ってから生じたものであった。

下宿へ帰ると彼は台所へ行つて冷たい水を一ぱい飲みほした。それから齒をきれいに磨いて自分の部屋へはいり、机に坐つて漢文の試験勉強にとりかかった。

「曰今有受人之牛羊而為之牧之者則必為之求牧与芻而不得則反諸其人乎抑亦立而視其死与曰此則距心之罪也……」

安吉はさらに続きを読みつづけた。

「他日見於王曰王之為都者臣知五人焉知其罪者惟孔距心為王誦之王曰此則寡人之罪也……」

しかし彼はあおい顔になつて引出しを引いた。

つまりこれだけの時間的余裕がそこには介在していたわけである。ただ時間的に余裕があっただけでなく、安吉が内省にむかうための手がかりは彼自身の内にあった。引用されている『孟子』の文言がそのことを暗示している。この『孟子』からの引用は、たまたまそれが漢文の試験範囲にあったという偶然によるばかりではなく、むしろそこ

『歌のわかれ』について

には作者の周到な意図が働いているように思われる。「しかし彼は……」の「しかし」は、『孟子』の内容、とりわけ「此則距心之罪也」「此則寡人之罪也」という部分にもかかわるもののように思われる。「しかし」安吉は「距心」や「王」のように論理の糸をたどることによつて内省におもむくことをしなかった。いったんは「冷たい水を一ぱい飲みほし」、「齒をきれいに磨き」、「机に坐」という行為におもむきながら、それを持続させることも、またその結果として佐野の無礼を止揚するような精神的な高みへ至りつくこともできなかった。かえつてそうした精神の営みに従おうとする自分を、「佐野の無礼」を許すゆるしがたい自己であるかのように認識し、激しくそれを否定する行為に出でいった、という点で安吉の言動は二重に非論理的な性格を帯びるものとなった。(しかも、そういう行為に従いはじめた段階においてもなお、「彼は細い三角鑿へちらりと眼をやったがそれはそのままにした。それは鋭いだけに肉のなかで折れる心配があった。」と判断するだけの心理的余裕を持っていた。)

それは、「まあそれはどっちでもいいじゃないですか……」といつて「仲裁にはいった」者に対して、「口論を止めることは承知したが、『それは、私にとつては、どっちでもいいことじゃない……』⁽¹⁰⁾といつて突つ立つばかりにした」と中野が書いている、「越中の片口安之助」の場合とは性質を異にするものである。

そもそも、「佐野の無礼」の内実は、「木の卓もろともに縫われる佐野の手の甲を幻に見ながら左手でドアを押す」という行為に安吉が出なければならぬほど、それほど決定的な無礼であつたとは客観的

に見て言えない。

彼はまっすぐはいって行って奥の方のテーブルに腰かけた。それから瓶詰を一本飲んで、腹がすいているので何か食おうかと思つて見まわした途端に人口わきのテーブルにかけて飲んでゐる佐野のうしろ姿を見つけてしまった。

そのとき安吉は見てはならぬものを見た時のようないやな気がした。その後佐野・桐山のグループは何かなし安吉をけむたがっているようであつた。いっしょに飲めば彼らの倍くらい飲み、喧嘩などはせず、彼らに害を加えず、しかし彼らのひどい乱暴や悪遊びの仲間にも加わらね安吉などは、こちらがおとなしくしているほど佐野たちにはたまらなく受けとられるらしかつた。

金之助が肉屋の二階で桐山に縞の財布を振つてみせて以来、こういう空気はいっそう濃くなつてもいた。縞財布のうらみまでも安吉にもちかけてくる気さへしたことが二度三度もあつた。あの日あれから犀川べりを歩きながら金之助がくわしく物語つた話からすると、彼らはほとんどやけくそになつていて、自分が亡びる時には他人も引きずりこんでやろうという哲学で、腹がまっくらになるほどいらいらした日を送っているらしかつた。そういう佐野が人口わきのテーブルで飲んでゐることは、今夜の安吉には不吉な前兆か何かのようになつて思われて生理的に不快であつた。

しかし安吉は意を決して起つた。水を一ぱい飲むと彼は帽子をかぶつて外套の襟をかけた。出口のところで彼はちよつと立ちどまり、

ちよつとこつちを向いた佐野におとなしく夜の挨拶をした。

「おさきへ失礼する。」

突然安吉は動乱を感じた。佐野はこつちを向いたまま三秒か五秒のあいだ安吉の顔を見つめ、そのまま外側へ首をねじつて「ふうっ…」と音を立てて酒の息を吐いた。

安吉はぶるぶるする思いであつた。平生から紫氣味の佐野のくちびるは、ふうつと吹き出した息そのままにいっそう黒くまくれあがつた形で閉じていた。

作品に描かれてゐる限りでは、「佐野の無礼」の具体的内実はこのやうなものであつた。この場面に先行する出来事として語られてゐる事柄も、安吉が考へてゐるほどに無礼なものであつたとは思へない。「桐山たち五、六人といっしょに浅野川の鳥屋へ酒を飲みにはいって行つ」て遭遇した彼ら仲間の喧嘩の件は、「安吉には何で喧嘩になつたのか、何で仲直りしたのかはてんでわからなかつた」と安吉自身がいっているやうな性質のものであつて、「『紫組』という不良少年団の名か何かからしい言葉をきいて、その音の安っぽさには心から軽蔑を感じた。そして、神戸や大阪のことを金沢くんたりまで持つてきて、『黙っているわけにはいかん』などといつて昂奮する人間になんとなく下等なものを感じた」という程度の、いわば非当事者の立場における経験にすぎない。「縞財布」の件にしても、財布を持ちあわせていないために「変にもじもじしていた桐山が向う側から」「おれや、今日、財布を持つてこなかつたんだ」と「口を出した」のに対して、金

之助が「おれや、今日、財布を持ってきたんだ」と「いうなり……桐山の眼のまへの台の上で、古い縞の財布の紐をぶらさげてぶらんぶらんと振って見せた」という程度のものであった。そもそも安吉と彼らとの間柄は、「佐野も桐山も安吉は姓だけしか知らなかった。いっしょに酒を飲む分には親しくしていても、金之助にたいするのなどとはちがっていっさい私生活上の交渉はなかった」といったようなものであった。

つまり「佐野の無礼」の内実は、安吉自身が前段で云っているように「許せる」範疇のものであって、「佐野の無礼をおまえが許すことは許せぬぞ」と云わねばならぬような質のものではなかった。むしろ如上の出来事は、それが安吉の眼を通して描かれたものであるにもかかわらず、かえって安吉や金之助の言動こそが一方的なものであることを示している。そのように印象される。それまでにどのようないきさつがあったにせよ（しかしそれは作品の中に描かれていない）「変にもじもじ」しながら「おれや、今日、財布を持ってこなかったんだ」と「口を出した」桐山の態度は礼儀にかなったものであると言える。そうした桐山に対して示した金之助の言動こそ、無礼この上もない振舞いであったと言うべきであろう。それは、「ちようどこっちを向いた佐野におとなしく夜の挨拶をした」にもかかわらず、その安吉に対して佐野が「こっちを向いたまま三秒か五秒のあいだ安吉の顔を見つめ、そのまま外側へ首をねじって……云々」という図柄に対応する。しかし無礼の度合いという点では前者における場合の方が、後者の場合に比べていっそうはなはだしい。そうであるにもかかわらず、一方

『歌のわかれ』について

の安吉は「ぶるぶるする思いで」それを受けとめ、はては「佐野の無礼をおまえが許すことは許せぬぞ」という激情におもむくことになるのだが、他方桐山の心事に関しては一言もふれられていないのである。桐山はいわば泣き寝入りの形で処理されてしまっている。のみならずこの桐山の件は、桐山の心事に関していささかの忖度もなされぬまま安吉によって桐山自身が処理されてしまったようには、安吉の内面において処理されず、それはいつまでも記憶にとどまり、そして今の場面で見え、佐野に対する感情ならびに態度を形づくる一要因にさえなっているのである。あたかもそれは、「神戸や大阪のことを金沢くんだりまで持ってきて、『黙っているわけにはいかん』などという昂奮する」桐山・佐野たちの言動に（「なんとなく下等なものを感じた」と安吉が云っている当のものに）かよい合う性質のもののように思われる。

さらに言えば、安吉が彼自身と桐山・佐野らの生活態度を対比しながら語っている場面が、先に引用した文章の中にあったが、そこに見られる安吉の認識もやはり一面的である。「いっしょに飲めば彼らの倍くらい飲み、喧嘩などはせず、彼らに害を加えず、しかし彼らのひどい乱暴や悪遊びの仲間にも加わらぬ安吉などは、こちらがおとなしくしているほど佐野たちにはたまらなく受けとられるらしかった」という自他に関する認識の仕方には、都合のよすぎる点が見られる。『歌のわかれ』の中の安吉や金之助は、喧嘩ごしで事に対している場合が多い。そのことを忘れたようにして、「喧嘩などはせず」「こちらがおとなしくしていればいるほど」と云ってそのことを強調している

のは、実情に合わない。それは、作家藤堂高雄を訪ねた際に、「文字どおり無愛想な顔をしつづけてい」る藤堂と対座して、「こういう無愛想な人間にたいして、微笑しながらでなければ人とのいえない自分がいつまでも向きあっていることは誇りを傷つけられることであつた」⁽¹⁾と安吉が感じているのと同様に、安吉の自己認識の甘さを露呈していると言つてさしつかえあるまい。

ところが、桐山や佐野に関しては、「彼らはほとんどやけくそになつていて、自分が亡びる時には他人も引きづりこんでやろうという哲学で、腹がまっくろになるほどいらした日を送っているらしかった」という見方をしている。この人間観察は、おのれを対象にした場合に比べてはるかに厳しいものになっている。人間認識に関する一定の基準を安吉は持ちあわせていないかのように見える。

「……という哲学で、腹がまっくろになるほど……」という見方および表現は、それが若者の認識と感性に基づくものであるかどうかを疑わせる。こうした一方的な認識に基づく判断が、佐野に対する安吉の潜在的な感情を形づくり、この感情が佐野に対する「生理的」な「不快」、「紫気味の佐野のくちびる」の色や形に対する嫌悪感と結びついて、「佐野の無礼は……云々」という感情上の昂りに安吉をおもひみられぬままに一方的に捨象されてしまっている。安吉が佐野の姿を認めた時点において——佐野が安吉に対してどのような態度で臨むのであるか——いまだ全くわからない段階ですでに、安吉の内には、先行するくさぐさの出来事がもたらした感情上のわだかまりが素因となつ

て、「見てはならぬものを見た時のようないやな氣」持ちや、「不吉な前兆か何かのように思われて生理的不快であつた」というような感情が用意されているのである。あらかじめ用意されたこれらの感情が相手に反映しないはずはない。

「しかし安吉は意を決して起つた」——そうした安吉の氣負いは、「ちようどこちを向いた佐野におとなしく夜の挨拶をした」という安吉の主観的な自己認識を裏切つて、すくなくとも佐野の主観に即してみるかぎり、「おとなし」い「夜の挨拶」として素直に受け取れる性質のものではなかつたにちがいない。

「『おさまへ失礼する』安吉は動乱を感じた」……この「動乱」は、そうした自分の氣負いにみずから感應して生じたものであろう。佐野の「こちを向いたまま三秒か五秒のあいだ安吉の顔を見つめ」という仕種、「そのまま外側へ首をねじつて『ふうっ……』と首を立てて酒の息を吐いた」という行為は、その反映として生じたものであつたろう。

緊迫した場面での、対峙しあう人間相互の内的感情、心理の様態が、対峙を必然とする姿において充分にまた具体的にここには描かれていない。すくなくとも佐野の側の内面はほとんど全く描かれていない。描かれているとしてもそれは暗示の域を出ない。言い換えれば、両者の人間関係において、対峙を必然とする本質的理由・原因が見当らないのである。つまり、安吉を激させるに足るだけの「無礼」の実体をこの場合の佐野は持ちあわせていない。そこにあるのは安吉の側の一方的な感情、それも「生理的」な「不快」感であり、「紫気味の佐野

のくちびる」に関する感覚的な嫌悪感だけである。それは、「ドアをあけてはいつてきた作田博士をひと目みた瞬間安吉は心からがっかりした。ギリシャ人がほんとうに正しかったとすれば——彼はいつかそういうことを何かの抄訳本で読んでいた。——こういう容貌の人によって講義される倫理というものはありえなかった。」⁽¹²⁾という場合と同様、理不尽なものである。論理性を全く欠いているばかりか、それは非人間的でさえある。

目の下のちょっとした面積の痣^{きず}、「社会的諸規定」の一つとは義理にもいえぬそんなものが、そのアンサンブルとしての一人の女の生涯をどれほど残酷に変えてしまっただろう。痣ならばまだいい。理由が理由としてそこで成り立つ。そこまで行かぬもの、息が臭いとか、顔つきが何となく人好きしないとかいふだけのこと、もっと手まえのことさえもがなんと人間のあいだに多くって、そこへ嫁・姑の関係とか、上役・下役の間係とかが絡んできて、なんと話のつけようのないさまざまな不幸を、厚いラシヤ地のようにまちがいがなく織りださずにはおかぬのだろう。不幸に生まれついたために不幸になるということがほんとうに現にある……⁽¹³⁾

人間に関してこのような見方をする時の片口安吉（この場合は『むらぎも』の中の安吉であるが）は、この上なく人間的である。その視野の広がりや深く、その深さは深い。その認識および感性は清廉な人間洞察に裏うちされており、感性的であることがそのまま深い意味の

論理性につながる、そうした論理の姿がここにはある。論理が論理であるための必然として、それは感性的な要素をも備える、そうした本来的な感性がここにはある。「息が臭いとか、顔つきが何んとなく人好きしないとかいふだけのこと、もっと手まえのことさえ」にも、こうした人間的な見方をするのできる安吉が、言い換えれば、そういう安吉を描くことのできる（むしろ、そういう安吉あるいは主人公をこそ多く描いている）中野重治が、佐野に関しては何と非人間的な見方をもって対しているのだろう。今の場合安吉は、むしろ「話のつけようのないさまざまな不幸を……まちがいに織りださずにはおかぬ」側の人間として、佐野の「紫気味のくちびる」等に対している。繰り返していえば、安吉の怒りの素因をなす主要なものは、佐野に対する生理的・感性的な不快感であって、それ以外にさしたるものは見出せない。それにもかかわらず、事柄は安吉によって次のように収斂されている。

安吉は佐野とのいきさつを思い出したが、やはり同じ結論への材料としか受け取れなかった。（略）実に簡単だった。安吉がドアを押してはいった時には佐野はもういなかったのだった。安吉はそのまま自分の部屋へ帰って試験勉強の続きをつづけた。あれはほんとうに仕合せだった。あの時鑿を握った右肘の関節をつづばっていたことを思えば、運よく佐野がいたところで、しかと刺せたかどうかはかなりの疑問だった。しかしはたしてあれが仕合せだったろうか。何か深い意味、たとえば摂理というような意味からいえば一つの刃^{やいば}

傷沙汰^{じやうさた}が避けられたというだけでも仕合せだったといえよう。しかし自分にとって、どたん場まで行かなかったことが仕合せといえるかどうか。結局おれは、精神の貧弱さから知らず知らずどたん場を避け、また他の場合には、外からの偶然がどたん場に突きあたることから自分をよけさせ、こうして「窮地」に落ちることなく一生過ぎてしまふのではないか。幸福といえる幸福、不幸といえる不幸を経験することなく、時々小さな幸福を幸福と感じつつ、特に時々小さな不幸をいくらかもったいぶって不幸を感じつつ、人間として低い水準をずると滑って行くのではなからうか。

時を置いた今、「佐野とのいきさつ」はある冷静さをもって振り返られている。「いきさつ」をみる安吉の見方に一種の質的变化がみられる。けれどもその質的变化は、佐野と安吉との関係におけるもっぱら安吉自身の側の問題に、しかし安吉の内面における対人間観上の、あるいは人間認識・人間把握上の問題に深くかわるものとしてのそれではなく、佐野に対応する外面的な態度・行動上の問題に限ってみられる変化にすぎない。したがって、佐野の人間性や心事に関する踏み込んだ分析・検証は依然として手つかずのまま据え置かれており、その意味では安吉の佐野観には何らの質的变化もみられないといえる。「あれはほんとうに仕合せだった。あのとき鑿を握った右肘の関節をつつばっていたことを思えば、運よく佐野がいたところで、しかと刺せたかどうかはかなりの疑問だった」という安吉の述懐内容が、そのことを明らかにしている。

「佐野の無礼」は、今の安吉にとっても依然として同質の「無礼」であって、「おまえが許すことは許せぬ」性質のものとして変わらずにある。安吉は今の時点でも「佐野の無礼」や佐野の人間性に対して寛容ではない。その意味で、この質的变化は安吉がいみじくも言っているように佐野との外面的な「いきさつ」にかかわるものであった。

「佐野の無礼」の内実そのものについての検証、およびそれにかかわりあった安吉自身の内面問題に関する検討が据え置かれたまま、事柄は抽象されて安吉の人生観上の問題に帰納されていく。即ち、「どたん場」とか「窮地」とか「幸福」とか「不幸」という問題に結びつけられていく。しかし、この結びつけには論理上の飛躍があり無理がある。安吉の述懐、その述懐を通してあらわれた内省には、これを独立したものとしてみるかぎり、一定の論理が存在していると言える。しかしその論理は、そもそも「佐野とのいきさつ」にかかわって生じてきたものであるにもかかわらず、先に述べたように「いきさつ」そのものの内的な分析・検証が放擲され、それにかかわりをもった彼我の内面問題が据え置かれたまま出されてきたという点で、独断的なものであると言える。ここでも事柄は安吉の側に一方的に引き据えられて眺められている。

論理上の無理はそれだけにとどまらない。あの程度の「佐野の無礼」に触発されて生じた安吉のあのような行為が（結果において刃傷沙汰が避けられたにせよ、避けられなかったにせよ）、「精神の貧弱」「どたん場」「幸福といえる幸福」「不幸といえる不幸」、あるいは

「人間としての低い水準」というようなものにただちに結びつけて考えられねばならないような質のものではない。この結びつけには論理上の飛躍があり無理がある。

実は、佐野とのあのようなかわり方こそが、おのが「精神の貧弱さ」を証しているのではないか、という自覚におもむくことによってのみ、「精神の貧弱さ」から抜け出ていくことが可能になるのではないか。かりに佐野との間に「刃傷沙汰」が成立し、そのことによって安吉がおのれの希求する「どたん場」「窮地」に「落ち」ることができたと仮定したとしても、そこから得られるものにはなほどのものでもあるまい。それは生産的なものでも人間的なものでもなく、「幸福」といえる幸福」「不幸といえる不幸」をもたらすものでもない。ただか「時々小さな幸福を幸福と感じつつ、特に時々小さな不幸をいくらかもったいぶって不幸を感じ」ることに役立つ程度のものであり、要するに「人間としての低い水準」にとどまるものであるにすぎない。

言い換えれば、安吉は今の時点においても「佐野の無礼は許せるが、佐野の無礼をおまえが許すことは許せぬぞ」という論理的矛盾から脱け出せずにいるばかりか、むしろ後段の決意を一段と補弱するために「どたん場」「窮地」「人間としての低い水準」というようなことが、ここで云われているのであって、したがって、前段と後段の論理的矛盾は解決されていないばかりか、むしろ安吉によって一層拡大され強化されてしまっているのである。前段と後段の間に横たわる論理上の矛盾に眼をむけ、それを解決し、両者を統一させるために精神を集中

『歌のわかれ』について

していくこと、つまり、佐々木基一氏の言葉を借りて言うならば「第一句と二句との中間に」横たわる「広大な認識の領域」に立ち入って、「本来展開されるべき」思考をそこに展開することによってのみ、はじめて安吉は彼の希求する精神の「どたん場」「窮地」に立つことができる。

II

この「佐野とのいきさつ」の場面はしかし、「歌のわかれ」というこの作品の題名から推して、場面そのものが、総体として否定されるべき性質のものとして描かれているのかも知れない。つまり、安吉によってやがて止揚されることになる「短歌的なもの」の一具体として作品の中に位置づけられ、そうした観点から否定的に描かれているのかも知れない。その点に作者の意図があったとみることもできる。けれども現前の作品はそれを裏切る形で成立している。「歌のわかれ」をもたらす一要因として、いわばそこに至る一つの過程を表象するものとして描かれたにしては、この場面は他の幾つかの場面と共にそれ自身としてのリアリティにみちている。一種自律した姿をさえ備えている。むしろ「短歌的なもの」の色合いの濃い爾余の部分に對照し、「短歌的なもの」との訣別におもむこうとする安吉の心理を内から支えるものとして描かれているようにみえる。止揚されるべき場面としてあるよりも、強調され宣揚されるべきものとしてあるように受けと

れる。そればかりではない。「短歌」ないし「短歌的なもの」との「わかれ」が明確に決意されるこの作品の結末部の姿に、直接重なるものをそれは多くもっている。

……げっそりした気持で彼は本郷通りを歩いて帰った。彼は袖を振るようにしてうつむいて急ぎながら、なんとなくこれで短歌とお別れだという気がしてならなかった。短歌とお別れということ、このさい彼には短歌的なものとの別れということでもあった。それが何を意味するかは彼もわからなかった。とにかく彼には、短歌の世界というものが、もはやある距離をおいたものに感じられだしていた。頼子につながっていた長い間の気持もどこかへ溶けてなくなっていくようであった。

彼は手で頬を撫でた。長いあいだ彼をなやましてきたニキビがいつのまにか消えてしまっていた。いつから孔だらけになったか彼は知らなかった。しかし今となつてはその孔だらけの顔の皮膚をさらして行くほかはなかった。彼は兇暴なものに立ちむかつて行きたいと思いはじめていた。

「立ちむかつて行きたいと思いはじめた」「兇暴なもの」と、それに対蹠されて云われている「短歌」ないし「短歌的なもの」、そうした対置の図式。そして、「兇暴なもの」の実体や「短歌的なもの」の内実が明らかにされないままで言われているそれとのわかれ。そこには「佐野とのいきさつ」の場面にみられた安吉の思考や行動の態度にか

よい合うものがみられる。つまり、「佐野の無礼」の内実が聞かれぬままに、「佐野の無礼をおまえが許すことは許せぬぞ」というところへ出て行き、さらには「どたん場」「窮地」というものを希求するに至る、安吉の思考過程に重なるものがそこにはある。

「短歌」あるいは「短歌的なもの」との訣別を安吉に決意させるに至った直接のきっかけは、「学内の短歌会」での体験であった。当の短歌会の雰囲気は、安吉の眼を通して描かれている限りでは「一種の社交性を帯びた」性格のものであり、外来者としての安吉にとっては「我慢しきれない」ものであった。だが安吉に「我慢しきれない」感情をいだかせた直接のものは、ある女のものと思われる二首の短歌作品をめぐってとりかわされた「甘やかした批評」であった。それに対して安吉が行なった「反駁」は正当であるが、その正当性は短歌会でも大筋認められているし、安吉に作品を批判された当の「女」自身さえ「そういう批判も成立つと思います」と云ってある程度は是認している。そうしたやりとりのあとで「最後に最高点の歌が二つ並べられることになった」。

「待ちてゐる姿まもりつつ陸橋の階のこまかきを急ぎてくだる」
「急ぎくだる陸橋の階のこまかさや姿まもりつつ足は定まらぬ」
安吉の歌が最高点にはいつていたのであった。

「このこちらのほうは」と教授らしいまんなかの男が言いながら決草をつまみあげた。「いいとは思いますが、『陸橋の階のこまかさ』、この『こまやかさ』というところがちょっと息をぬいてい

ると思いますね。私としては、やはりまっすぐに押している初めのほうが上だと思います。」

「ふん。こいつは人なみのことをいうぞ。」

自分の作が最高点になってしまったため、安吉は赤くなるのを抑えつねながらてれかくしに肚のなかで「何を」と考えていた。その男につづいてあちこちから批評が起った。(略) まんなかの老人の批評をも、安吉は全部そのまま受け入れることはできなかったが、あとから出た批評はだんだんに質が落ちていた。なかにまじっていた安吉にもはっと響いてきたようないくつかの言葉も、結局がやがやした批評のなかでぼんやりとぼかされて行ってしまった。心をこめてつくった作品が、心をこめたことをも入れて認められた時のほてるような恥かしさのまじった嬉しさ、そういうのは結局して安吉には感じられなかった。

このあとに、先に引用した「げっそりした気持で……」以下の文章が続くのだが、ここに描かれている安吉の態度は、「佐野とのいきさつ」に際して見せた安吉のものと変るところがない。まだしもあの場合にはおのれの「精神の貧弱さ」に思いをいたし、「どたん場」とか「窮地」とかいうことを口にしていたが、そうした内省の跡は、この場合の安吉の中には一つとして見られない。「女」の作品に「反駁」を試みた時の安吉は、「立って安吉にはっきり賛成するもののなかったことが気に食わなかった」と云っているのだが、自分の短歌作品に関する「教授らしい」男のていねいなそして正当な評言に対しては

「ふん。こいつは人なみなことをいうぞ」というふうに応えている。

「心をこめてつくった作品が、心をこめたことをも入れて認められた時のほてるような恥かしさのまじった嬉しさ、そういうものは結局して安吉には感じられなかった」——しかしそれは「結局して」安吉自身の心や態度の問題であろう。短歌会のメンバーたちは、安吉によってその短歌作品の「格」の低さ、短歌認識の低俗さを論難されているにもかかわらず安吉の作品に最高点を入れ、「教授らしい男」をはじめとしてそれぞれが批評を開陳しているのである。彼の作品は認められたのであり、おそらく、評価の程度に差はあるにしろ「心をこめたことをも入れて」人々は認めたのである。安吉に「ほてるような恥かしさのまじった嬉しさ」が感じられなかったとしたら、それはすでに安吉の内に「短歌」あるいは「短歌的なもの」に対する「わかれ」が用意されつつあったからだろうし、また、結局はそのことに根底のところで関係することだが、短歌に関するしたたかな矜持がその時の安吉の心にあつたからだろう。「安吉は、右手から右手からとまわってくる詠草を読みながら、『あ、これはまずいな』としきりに考えていた。どの歌もどの歌も、巧みさということを取りのけて考えれば、安吉たちが田舎でやっていた歌会のものにくらべてずっと格が落ちていよううに思えた。」

「彼は、人のほめるような中途半端な歌が出るたびに、何かこっぴどく言ってやりたいと思うのを何とか我慢しつつづけていた。」という安吉の思いにそれは端的に現われている。

しかしこの場面から判断する限り、理不尽なのは安吉の方である。

事柄はほとんど安吉の一方的な独断に基づいて裁断されてしまっている。なんと安吉はこうるさく、腹を立てやすい人間だろう。「この見なれぬやり方にかすかながら不満を感じた。」「何かこっぴどく言ってやりたいと思うのを何とか我慢しつづけていた。」「安吉は我慢しきれなくなった。」「安吉はそこでわかにむらむらしてくるのを感じた。」「なんとという女だろう。」「安吉は猛然としてもう一度立ち上って言った。」「ほとんど彼は『なんだ』というばかりの気持をやっと抑えていた。」「安吉としては……気に食わなかった。」「ふん。こいつは人なみのことをいうぞ。」「安吉は……肚のなかで『何を』と考えていた。」「こういう具合である。一つの事柄をめぐって対立する意見がある冷静さをもって受けとめ、彼我の意見の相異を論理的な道ゆきを通して客観的に判断するということがここにはみられない。多くは彼の主観において受けとめられ処理され、しかしそのことについての実質的な内省が試みられぬままに、「短歌」「短歌的なもの」との「わかれ」に一挙におもむいていくのである。したがって、「わかれ」が決意されながらも、それを必然とした「短歌」そのものについての検証や、「短歌的なもの」の内質に関する明らめはなされない。」「……短歌的なものとの別れということであった。それが何を意味するかは彼にもわからなかった。」という形で据え置かれることになる。この事情は「佐野とのいきさつ」の場合と何ら異なるところがない。言い換えれば、「佐野とのいきさつ」の場面における安吉の言動、態度、人間認識及び自己認識の在り方等は、この作品の終結部に至っても、これといった質的变化もなしにほとんどそのままの形で引き継がれて

いる。極言すれば、「佐野」が「短歌会のメンバー」に替り、「三分の丸鑿」が「兇暴なもの」に替っただけである、と言えるかも知れない。

「電車みちへ出てきたミミズ」の件、列車から「差し出された」手の件が、この作品の他の場面に描かれており、それは新しい人生と人間の姿にめざめていく安吉の内面のありさまを鮮明に照射しているが、結局そうしたものも、この終結部の安吉には反映していない。つまり安吉の魂に質的变化をもたらすまでには至っていない。その意味では、この作品に描かれている「歌のわかれ」は、「わかれ」であって、「歌」の実質的な克服でも否定でも止揚でもない。「歌」はそのままの姿でそこに捨て置かれ、主人公片岡安吉だけがそこから離れて「兇暴なもの」にむかって歩み去っていった。

「短歌的なもの」あるいはそれとの「わかれ」を問題にするとするならば、むしろ、佐野との関係における安吉の態度、あるいは「短歌会」との関係における安吉の態度こそが、安吉の云う「短歌的なもの」にはかならない、とも言えるのであって、それこそが、安吉が「わかれ」なければならない当のものであったにちがいない。

注

- (1) 中野重治「一つの高等学校期と一つの大学期」(『わが生涯と文学』)
- (2) 山室静「歌のわかれ」(旧版全集『中野重治研究』所収)
- (3) 江藤淳「中野重治の小説と文体」(同右)
- (4) 中野重治「歌のわかれ」「序」

(5) 大西臣人「中野重治小論」(旧版全集『中野重治研究』所収)

(6) 佐々木基一「中野重治」(『昭和文学の諸問題』所収)

(7) 臼井吉見『中野重治集』(市民文庫)「解説」

(8) 中野重治『斎藤茂吉ノート』(ノート三 茂吉にあるわかりにくいもの)

(9) 注(3)に同じ。

(10) 中野重治「むかしのことむかしの人」(『わが国 わが国びと』所収)

なお、これに続けて中野重治は「後に私が小説を書いて、主人公の名を片口安吉としたのには片口安之助の記憶が関係していたかも知れない。」と書いている。

(11) 中野重治『歌のわかれ』

(12) 同右

(13) 中野重治『むらぎも』